**〔注　意〕**

* **解答はすべて解答用紙に記入すること。**
* **特にことわった場合をのぞいて、解答の字数指定では「、」や「。」その他記号も一字に数えます。**

**一**　次の――線のカタカナは漢字に直して書き、漢字はその読みをひらがなで書け。

⑴　世の中のアワれが身にしみる。

⑵　来客をカンゲイする。

⑶　急ブレーキのショウゲキに備える。

⑷　友人の発言をベンゴする。

⑸　選手を代表して宣誓する。

⑹　卑屈な考え方を改める。

⑺　との間に橋が架かる。

⑻　硫黄のにおいがする。

**二** 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

　初めてエウステノプテロンの名が報告されたのは一八八一年と古く、動物の祖先、あるいはそれに近い魚として有名になった。そのためしばしばエウステノプテロンは、陸へ上がろうとして体の半分をから出している姿でかれてきた。この絵を見た人も多くいるだろう。

しかし現在では、体が流線型であること、が横についていることなどから、エウステノプテロンは完全に水中に生息していたと考えられている。陸にも上がれる水辺の動物は、ワニやカエルのように眼が頭の上のほうについていることが多いのだ。【ア】

もちろん、エウステノプテロンが陸上に上がれるといされたのには①理由がある。それはエウステノプテロンの胸ビレと腹ビレである。そのずんぐりとしたヒレには、つけねに一つ、その先に二つの骨があった。その骨の形もまた、、に似ていたのである。【イ】

四肢動物の肢の骨のパターンである「一本、二本、手首の骨、指の骨」と比べると、ハイギョは最初の「一本」だけだったが、エウステノプテロンは最初の二つ、つまり「一本、二本」があった。エウステノプテロンは、（あるいは）を持つ魚だったのだ。陸上で生活していたと勘違いされても無理はないだろう。

イメージしてほしい。あなたはうつぶせにれている。起き上がらなくてはならない。

あなたはまず、手のひらをにつけて体を起こすだろう。指は使わなくてもいい。指は床からかせていてもいいけれど、　Ａ　た手首を床につけないと、起き上がることは困難だ。

もし腕や脚がただのまっすぐの一本の棒だったら、パタパタと手足をバタつかせながら床をころげまわることしかできない。起き上がるためには、じつは腕や脚を　Ａ　ることが必要なのだ。

とくに手首を　Ａ　ることは重要だ。手首があれば、起き上がることができる。そして、腕立てせができる。【ウ】

腕立て伏せなんて、つまらないことのように思われるかもしれない。でも腕立て伏せができれば、　Ｂ　手首があれば、水面から顔を出すことができる。【エ】

でも、なかなか腕立て伏せができる魚の化石は見つからなかった。もし見つかれば、それは②魚類と四肢動物をつなぐ中間的な化石になる。そしてついに二〇〇四年に、まさに願っていたような魚の化石が報告された。それがティクターリクだった。

「一本、二本、手首の骨、指の骨」と比べると、ティクターリクにないのは「指の骨」だけだった。なんとティクターリクには未発達ながらも「手首の骨」、つまり手首があったのである。まさにエウステノプテロンと四肢動物の中間型であった。

さて次は、いよいよ指だ。地球上で最初の指は、イクチオステガやアカントステガに見られる。ともにデボン紀後期（約三億六千五百万年前）にすんでいた初期の両生類だ。

ここで少しだけ、両生類について説明しておこう。両生類は、進化史上最初の、そして完全な四肢動物だ。

両生類はその名のとおり、水中と陸上と両方で生活できる。　Ｃ　、陸上で生活はできるものの、あまり水辺かられることはできない。卵は水中に産むし、生まれてからも幼生の時期は水中で生活する。しかし大人になると、たいていエラはなくなって、空気呼吸をするようになる。オタマジャクシはエラ呼吸をするが、カエルになると空気呼吸をするのである。【オ】

ちなみに両生類の空気呼吸というのは、おもに呼吸である。肺は補助的な役割をしているだけだ。中にはハコネサンショウウオのように、まったく肺がないものさえいる。

このように両生類は、完全に水中で生活しているわけでもないし、また完全に陸上で生活しているわけでもない。水中と陸上という両方のが必要な生物なので、両生類というわけである。

さて、デボン紀に話をもどそう。アカントステガやイクチオステガの肢は、すでに「一本、二本、手首、指」のパターンを持っていた。もはやヒレではない。完全な肢である。アカントステガは指を八本、イクチオステガは七本も持っていたのだ。

しかしアカントステガは、大きいビレも持っていた。したがって完全に水中で生活していたと考えられる。こんな大きな尾ビレを引きずりながら陸上を歩いたら、たちまち尾ビレはズタズタになってしまうからだ。しかも骨格の形から見て、アカントステガはエラも持っていたと考えられるのだ。

一方、イクチオステガはアカントステガとは違い、たまには陸上に上がることもあったらしい。の骨はで、また前肢は後肢よりも大きかった。今のアザラシみたいである。おそらくアザラシのように歩き、水陸両方で生活をしていたのだろう。

また、理由はよくわからないが、イクチオステガのは異常に頑丈だった。心臓や肺を囲んで守っている肋骨は、ヒトでは一本一本が離れているし、呼吸をするときには動かすことができる。だがイクチオステガの肋骨は、大きくておいに重なり合い、ルセットのようになっている。これでは体を曲げることもできないだろうし、とても重たかったにちがいない。したがって、陸上に上がることはあったかもしれないが、あまり速く動くことはできなかっただろう。【カ】

まあ当然と言えば当然なのだが、魚は陸に上がるために肢を進化させたのだと、かつては考えられていた。なんといっても四肢動物の肢は、陸上を歩くためにあるのだから。そういう仮定のもとに、③さまざまな仮説が考え出されてきた。

たとえばこんな仮説があった。陸上がして池が上がることもあっただろう。そのとき魚に肢があれば、歩いて別の池にたどりつくことができたにちがいない。したがって肢は、　Ｄ　ためではなく、　Ｅ　ために進化したのだ。

また別の仮説としては、水中にはろしい者がいたというものがある。それらかられるためにに、そして陸上へと進出したのである。そのために肢が進化したのだという仮説である。

でも、なんだか変な話だ。おそらく初期の四肢動物の子供も、オタマジャクシのように水中で生活していたはずだ。そこに恐ろしい捕食者がやってくる。親はスタコラと陸上にげてしまう。でも子供は捕食者に食べられ放題だ。こんなことって、あるだろうか。

④現在では、エウステノプテロンもティクターリクもアカントステガも完全に水中にすんでいたとされている。イクチオステガもほとんど水中にすんでいた。ということは、四肢動物の肢は水中で進化したのではないか。ひょっとして、肢は　Ｆ　進化したわけではないのかもしれない。

（『的進化論　１％の奇跡がヒトを作った』による）

〔注〕＊１　上腕骨、橈骨、尺骨……四肢動物の骨で、上腕骨は肩からひじまでの部分にある骨、橈骨と尺骨はひじから手首までの部分にある骨のこと。

＊２　コルセット……整形外科で、背骨の固定やなどに用いる器具。

**問一**　次の一文は、本文中のある段落の最後からき出したものです。戻す場所として最も適切なを本文中の【ア】～【カ】から一つ選び、記号で答えなさい。

浅瀬にすんでいる動物にとっては、を見つけたり空気を呼吸したりするときに、とても役に立っただろう。

**問二**　線①「理由」とありますが、これについて次のように説明するとき、　ａ　～　ｃ　に当てはまる最も適切な表現を本文中からそれぞれ指定字数でさがし、抜き出して書きなさい。

エウステノプテロンは、　ａ（七字）　の骨の形が、ハイギョなどの魚と比べて　ｂ（十三字）　に近くなっており、これによって　ｃ（十二字）　と考えることができたから。

**問三**三か所ある　Ａ　に共通して当てはまる表現を本文中から二字でさがし、抜き出して書きなさい。

**問四**　Ｂ　・　Ｃ　に当てはまる最も適切な表現を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

**ア**　したがって　　　　**イ**　たとえば　　　　**ウ**　もしくは

**エ**　なんとなれば　　　**オ**　とはいえ　　　　**カ**　つまり

**問五**　線②「魚類と四肢動物をつなぐ中間的な化石になる」とありますが、「腕立て伏せができる魚の化石」がそのように言える理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　腕あるいは脚をもつ魚はいるが手首のある魚はいないため、魚類と四肢動物の違いは手首の有無であり、腕立て伏せができる魚はそれによって次第に手首が発達していって、やがて四肢動物に進化したと考えられるから。

**イ**　魚類と四肢動物をつなぐ中間的な化石とは、二〇〇四年に発見されたティクターリクの化石のことであり、これは腕立て伏せをすることで陸上に出られる強い身体を作り、魚類を四肢動物に進化させた存在だったから。

**ウ**　魚類の中にはエウステノプテロンのように腕あるいは脚をもつ魚はいるが、それだけでは陸上に出ることは難しく、腕立て伏せという行為ができる身体構造を持つかどうかが四肢動物への進化の分かれ目と言えるから。

**エ**　腕立て伏せができれば水面から顔を出すことができたので、空気呼吸ができるという進化へとつながる道筋が生まれて、エラ呼吸しかできない魚類から空気呼吸ができる四肢動物へと進化するきっかけになったから。

**オ**　水中で生活する魚類と陸上で生活する四肢動物とをつなぐのは、水中と陸上の両方で生活できる初期の両生類であり、魚類に四肢が生えて腕立て伏せができる身体構造を持ったのがカエルのような両生類であったから。

**問六**　線③「さまざまな仮説」について、次の⑴・⑵の問いに答えなさい。

⑴　「さまざまな仮説」について筆者が簡潔に表した七字の表現をこれよりあとの本文中からさがし、抜き出して書きなさい。

⑵　⑴で答えた表現を筆者がしているのはなぜですか。本文で挙げられている二つの仮説に共通する理由を八十字以上百字以内で説明しなさい。

**問七**　　Ｄ　・　Ｅ　に当てはまる最も適切な表現を次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

**ア**　池から出る　　　　**イ**　池へる　　　　**ウ**　乾燥に耐える　　　　**エ**水から出る　　　　**オ**　水へ戻る

**問八**　線④「現在では、エウステノプテロンもティクターリクもアカントステガも完全に水中にすんでいたとされている」とありますが、その理由を次のように説明するとき、　ａ　・　ｂ　に当てはまる最も適切な表現を本文中からそれぞれ十字以上十五字以内でさがし、はじめの三字を抜き出して書きなさい。

**問九**　　Ｆ　に当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

エウステノプテロンは体の形や　　ａ　　などが陸上に上がれる生物のと異なっており、ティクターリクは水面から顔を出すことができる程度と考えられ、また、アカントステガは陸上を歩くのに適切でない大きな尾ビレがあるうえに、骨格の形から見て、　　ｂ　　から。

**ア**　陸でも暮らせるために　　　　**イ**　歩くために　　　　**ウ**　魚類個々の意志で

**エ**陸に上がるためだけに　　　　**オ**　陸上で

**三**　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

「」の家に、母親の友達のが、のに関して電話をかけてきた。電話のあとで、母親は「僕」に内容を話しはじめた。

「交通事故にっちゃったの」

ゆうべ自転車でから帰る、原付バイクと出会いにぶつかりそうになった。あわててハンドルを切ったはずみで転んでしまい、を骨折した。

「救急車も来たりして大変だったみたい」

ゆうべのサイレンを思いだした。おふくろは僕の向かい側に座って、が聞いているわけでもないのに、「それでね」と声をひそめてつづけた。

「原付バイク、ンタマの生徒が運転してたんだって」

「マジ？」

「救急車もその生徒が一一九番して呼んだんだけど……トンタマってバイク禁止よね？」

「うん、見つかったら一発停学」

「三年生しかいないんだし、受験前にバイク乗り回してるなんてないでしょ。だから、うんじゃないのって言ったんだけど、でも、ほんとにトンタマの生徒で、宮本さんは生徒手帳も見せてもらった、って」

「誰だったの？」

「篠沢さんも宮本さんから聞いただけだし、とにかくびっくりしちゃって、名前聞いたけどすぐに忘れちゃったみたいなんだけど……あんた、誰か心当たりない？」

僕はりんだ。ドカの顔が――①こういうときにかぎって、にこやかに笑う顔が、かんだ。

始業のチャイムが鳴っても、ドカは教室に姿を見せなかった。

入学以来の無無欠席記録がれてしまった。

「あいつ、食い過ぎで腹こわしたんじゃねえのか？」と笑うヒコザは、まだ交通事故のことは知らないようだ。教えてやったほうがいいのかどうか、よくわからない。それになにより、ドカが事故を起こしたと決まったわけではない。

朝のホームルームでも、クラス担任の矢野先生はなにも言わなかった。でも逆に、黙ったままというのが不自然な気がしないでもない。

②休み時間のたびに教室を回って欠席者を確かめた。ついでに、Ａ　、「原チャリに乗ってるとかっていなかったっけ」「なんか変なとか、今朝聞いてない？」と確認した。昼休みまでに結果がわかった。三年一組から六組まで、学校を休んでいるのはドカだけだった。原付バイクをこっそり乗り回しているのもドカ一人。

五時間目のが鳴って教室にる途中、思いきってドカのケータイに〈元気？〉とメールを入れてみたが、放課後になっても返事は来なかった。

こうなったら、あとはもう正面で事実を確かめるしかない。職員室には、そのな体当たりを受け止めてくれるはずのひとがいる。

足早にを歩きながら、ゆるんでいたネクタイをめ直した。呼び出しや日直や当番以外で、要するに自分から職員室を訪ねるのは、トンタマに入ってから初めてかもしれない。

職員室のドアを開けて見回すと、ジン先生がいた。教頭先生の真ん前の席だった。他の先生たちの世間話に加わらずに、一人で現代文の指導書を読んでいた。

背中を丸め、のける後頭部をしにテカらせた姿は、生徒相手に青春だの人生だのをアツく語っているときより、ひとまわり小さく見える。悪そうで、つまらなそうで、ちょっとさびしそうでもある。それを見て、③なんとなくうれしかった。理由はよくわからない。でも、もしも職員室のドアを開けた、他の先生たちとおしゃべりしているジン先生を見たら、そのまま引き上げてしまったかもな、と思う。

席に近づくと、声をかける前にジン先生は本から顔を上げた。おう、と少しだけをゆるめ、生徒にではなく友だちと話すようにつづけた。

「ドカくんがいないと、教室、静かだろ」

「あの……そのことなんですけど……」

先生は「うん？」と僕を見た。最初は④そうな顔だったが、僕が目をそらさずにいると、「まいっちゃったよな」と苦笑した。

その一言で、わかった。をんでうつむいた僕に、先生はの席のをめかけて、「いや、それより外に出るか」と言った。僕もそのほうがよかった。

「ヒコザとかムクちゃんにも教えてやっていいですか」

「じゃあ、中庭で話すか」

「……はい」

「なんだ、しょぼくれた顔して。だいじょうぶだ、だいじょうぶ」

ジン先生は席を立つと、僕のをポンといて歩きだした。ガニ気味にゆさゆさと歩く⑤先生の背中が、さっきよりに大きく、分厚くなった。

ドカの事故は、ゆうべのうちに警察や病院にけつけた矢野先生から、朝の職員会議で報告されたらしい。

処分は三日間の自宅。就職が内定しているということで、停学からワンランク軽くなった。香奈ちゃんの膝の骨折も、年内いっぱいは入院が必要でも、手術をしたり後遺が残ったりするようなものではなく、その面では、最悪の事態はれたわけだ。

事故そのものも、どちらかといえば香奈ちゃんのりだった。塾の帰りに、車道を自転車で走っていて、途中で向こうにろうとして自転車をぎながら後ろをり向いたら、ドカの原付バイクがちょうど角を曲がってきた。は十分あったが、急にヘッドライトのまぶしい光が目に飛び込んできて、あわてて手をかざして目をかばったら、片手ハンドルで体のバランスがとれなくなって転んだのだ。

「じゃあ、べつにドカが百パーセント悪いってわけじゃないのか」

僕とヒコザはほっとした顔を見合わせたが、ムクちゃんの表情は暗くんでいた。

「ムクちゃん、どうしたの？」

「その女の子、クリスマスも入院してるんですね……」

ジン先生も「そこなんだよ」とため息交じりに言った。「ドカくんもそのことで落ち込んじゃってるんだ」

ドカの両親はすぐに香奈ちゃんの両親に謝罪して、費や料のことも親同士が話し合って、うまくまとまりそうだという。

ただ、問題が一つ――。

「その子、ピアノを習ってて、クリスマスに発表会があるんだ。それをすごく楽しみにしてたんだけど、退院も難しそうだし、入院中は練習もできないから、あきらめるしかないってことになったんだ」

「でも、それはしょうがないっていうか、また今度のチャンスってことで……」

ヒコザが言いかけるのをさえぎって、「ないんだ」と先生は言った。「冬休みに引っして、三学期から転校するんだ、その子」

だから、「今度」や「次」はない。十二月の発表会が玉川ニュータウン最後の思い出になるはずだった。それが、事故のせいで台無しになってしまったのだ。

香奈ちゃんは、もちろんひどく悲しんでいる。それを知ったドカも、責任を感じて、でもどうすることもできずに、朝から部屋に閉じこもったままなのだという。

僕とヒコザはまた顔を見合わせた。ヒコザの頰はもうゆるんではいない。僕の表情も同じだろう。ダッシュでドカの家に向かいたかった。ドカに会いたい。ドカの顔を見て、にいつてやりたい。僕たちは、どちらからともなくうなずいた。二人とも気持ちは同じだった。

でも、先生はそんな僕たちに　Ｂ　ように言った。

「まあ、あとはドカくんの両親や矢野先生に任せるしかないよな」

「いや、でも……」

そう言われてあっさり引き下がるわけにはいかない。特にヒコザは、中退のときの借りを返したいのだろう、口をとがらせて反論した。

「友だちにしかできないこともあるんじゃないですか？」

そうそうそう、と僕も隣でうなずいた。めやましを言うつもりはない。現実的になにができるかもわからない。それでも、とにかく会いたい。ドカも僕たちに会いたがってるんじゃないか、とも思う。中退を決意したヒコザが、黙って学校をやめればいいのに、わざわざ僕とドカに別れの手紙を書いてよこしたように。

「気持ちはわかるよ」

ジン先生は一つうなずいてから、「でもな」とす口調で言う。「いまは誰とも会いたくないって、ドカくんが言ってるんだから」

オレらは別ですよ絶対に、と言いかけた僕を目で制して、つづけた。

「一人になりたいときに一人にしてやるのも、友だちの役目だ」

僕たちはなにも言い返せなかった。

（『空より高く』による）

〔注〕＊１　トンタマ……東玉川高校。「僕」が通っている学校。

**問一**線①「こういうとき」が指す内容を、本文中の言葉を使って二十五字以上三十字以内で説明しなさい。

**問二**線②「休み時間のたびに教室を回って欠席者を確かめた」とありますが、それはなぜですか。どのような気持ちがあっての行動なのかがわかるようにしながら、その理由を七十字以内で説明しなさい。

**問三**Ａ　に当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　いかんなく　　　　**イ**　ぬかりなく　　　　**ウ**　さりげなく　　　　**エ**　きたんなく　　　　**オ**　みさかいなく

**問四**線③「なんとなくうれしかった」とありますが、このときの「僕」について説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　ふだんは自分たちに青春だの人生だのをアツく語っていて、苦しみや悲しみをすでに乗り越えた大人のように思っていたジン先生も、実際の人生ではまだなやみをかかえたままだとわかって共感している。

**イ**　ジン先生に対しては、他の先生たちに対するものとは異なった親しみの気持ちをいだいているので、職員室でも他の先生たちと同じようなことをしていない何か変わった存在でいてほしいように感じている。

**ウ**　職員室がゆうべの交通事故のことでさわぎになってなどおらず、ジン先生の様子もいつもと特に変わりがなかったので、自分が不安に思ったようなことは起きていないのではないかという安堵感が生まれている。

**エ**　他の先生たちの世間話に加わらずに一人で過ごすジン先生を見て、やはり他の先生とはひと味違い、もし自分の不安があたっていても何とかしてくれるように思えて、そんな先生に出会えた幸運に感謝している。

**オ**　いつも自分たち生徒に寄り添ってくれるジン先生が、職員室では他の先生と変わらない様子でいたら失望したはずなので、生徒の期待に応えるために同僚と距離を置いてくれていることをうれしく思っている。

**問五**線④「怪訝そうな」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　理由やなどがわからず不審に思うような

**イ**　何かたくらみがあるのかとしんでいるような

**ウ**　自分の思い通りにならずにそうな

**エ**　真実をごまかそうとして必死でいるような

**オ**　思いやりにあふれてとても優しそうな

**問六**線⑤「先生の背中が、さっきより微妙に大きく、分厚くなった」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　生徒のことを第一に思っているジン先生は、生徒から頼られているという実感によって体中に気力が充満してくるから。

**イ**　ドカのことで不安をおぼえる「僕」にとって、励ましてくれるジン先生は安心させてくれる存在として目に映ったから。

**ウ**　職員室では猫をかぶっておとなしくしているジン先生だが、生徒のために行動しようと全力を出すつもりになったから。

**エ**　不安や緊張で萎縮してしまっていた「僕」だが、頼りになるジン先生といられることで気持ちが大きくなってきたから。

**オ**　さっきまでのジン先生はなぜか小さく見えていたが、言動に触れるうちにやはりいつものジン先生だと納得できたから。

**問七**　Ｂ　に当てはまる最も適切な表現を次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　を打つ　　　**イ**　釘をす　　　**ウ**　針を打つ

**エ**　針を刺す　　　**オ**　針を含む

**問八**　「僕」とヒコザが言葉を交わさなくても互いの思いをわかりあったことを表現している一文をさがし、はじめの五字をき出して書きなさい。

**問九**　本文の登場人物と表現についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　「僕」は、交通事故を起こしたらしいクラスの友だちのことをに心配し、自分のことは二の次にしてとにかく助けになりたいと思う、友情に厚い人物としてかれている。

**イ**　「僕」の母は、交通事故を起こしたのが「僕」が通う学校の生徒で「僕」の友だちではないかと不安になり、何とか状況を把握しようとする息子思いの人物として描かれている。

**ウ**　ジン先生は、生徒たちと友だち同士のように付き合い、青春や人生を語る態度が人気だが、他の先生たちとはあまり親密ではなく、職員室では一人で過ごす人物として描かれている。

**エ**　本文の初めは「僕」と母、半ばは「僕」とジン先生、最後は「僕」とジン先生や仲間たちの会話を中心に展開し、それぞれの中で「僕」がドカに対して抱いている心情が表現されている。

**オ**　本文は「僕」の視点で展開するが、「うれしい」「悲しい」のように「僕」自身の心情を直接述べることは少なく、言動やなどによって心情が伝わるように表現されている。

**四** 次の古文を読んで、あとの問いに答えよ。

にして病にみて苦しみふに、祖きてはく、「れ、子多しと云へども、陽勝仙人の中に我が①しき子。し、我がの心を知らば、来たりて我れをるべし」と。陽勝、力をて此の事を知りて、祖の家の上に飛び来たりて、をす。人でて、屋の上を見るに、②をば聞くと云へども形をば見ず。仙人祖に申して云はく、「我れ、永く宅をれて間に来たらずと云へども、③孝養のちに来たりて、経を誦しを通ず。の十八日に、をき花を散らして我れを待つべし。我れ、Ａ　をねて④に来たりりて、経を誦し法を説きて、の恩徳を報ぜむ」と云ひて、飛び去りぬ。

（『物語集』による）

〔注〕＊１　祖……親。

　　　＊２　本国……故郷。

　　　＊３　見る……みとる。死にに付きそう。

　　　＊４　通力……神通力。。

　　　＊５　火宅……安らぎのない現実世界を、火事で燃える家にたとえたもの。

　　　＊６　人間……人間の住む世界。人間界。

　　　＊７　強ちに……無理に。

　　　＊８　烟……けむり。

**問一**線①「愛しき子也」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　かわいい子だ　　　**イ**　かわいそうな子だ　　　**ウ**　ひどい子だ

**エ**　まずしい子だ　　　**オ**　おそろしい子だ

**問二**線②「をば」を現代仮名いに直して、すべてひらがなで書きなさい。

**問三**線③「孝養の為に強ちに来たりて、経を誦し詞を通ず」とありますが、陽勝仙人がこのようにした理由を次のように説明するとき、　　　に当てはまる内容を十五字以上二十字以内で書きなさい。

　　　　　と願う親の心を知ったから。

**問四**Ａ　に当てはまる最も適切な語を本文中からさがし、き出して書きなさい。

**問五**線④「此」が指す内容を次のように説明するとき、　ａ　～　ｃ　に当てはまる最も適切な語を、本文中からそれぞれ指定字数でさがし、抜き出して書きなさい。

　ａ（二字）　の　ｂ（一字）　の　ｃ（一字）　の上。

**問六**本文の内容に当てはまるものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

**ア**　陽勝仙人の親は、陽勝仙人が家を捨てて出ていったことで自らを責め、心身の病に苦しんだ。

**イ**　陽勝仙人は、神通力をこめた法華経を唱えることで、くなるの親を回復させた。

**ウ**　陽勝仙人の声を聞いた人が屋根の上を見たが、そのときはすでに仙人はいなくなっていた。

**エ**　陽勝仙人は親のために無理をしてやってきたが、もう二度とは来られないと親に告げた。

**オ**　陽勝仙人は受けてきた愛情に応える意志があることを親に告げて、飛び去っていった。